

仙石山仏教学論集
第 13 号（令和 4 年）

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. XIII, 2022

北宋单刻本『八十華嚴』について

刘 园园

北宋単刻本『八十華嚴』について

刘 园园

要 旨

『八十華嚴』は漢訳されて以降、華嚴宗の根本經典として東アジア仏教界で広く信奉され、歴代の大藏經に収録されただけではなく、単独の經典としても書写・刊刻されている。現存テキストの中には、一行15字の版式を採用した貴重な宋代の単刻本が伝存している。

本論文では、北宋単刻本『八十華嚴』の現存伝本の書誌情報を紹介し、これら単刻本の経板の雕造過程を検討した。特に、台北故宫博物院所蔵本の重要性を指摘し、その形式の特徴と底本を分析した。最後に、これらの単刻本と江南地域の華嚴結社の関係を検討した。

華嚴結社の当該地域における刊經活動を巡っては、その歴史は、唐代にまで遡ることができ、同結社は仏教經典の雕刻・印造・流通にも取り組み、宋代に至り広く影響を及ぼした。その結果、南宋紹興年間（1131～1162年）に湖州で思溪藏が刊刻された際に、『大仏頂首楞嚴經』の底本として、可孜（10世紀頃？）と智海（10世紀頃？）が大中祥符寺天宮經藏院で刊刻した一行15字の単刻本が採用されたのである。思溪藏本『八十華嚴』については、何を底本としたかは不明であるが、一行15文字の版式を採っており、これは一般的な思溪藏の版式と異なっていることがわかる。

1. はじめに

八十卷本『大方広仏華嚴經』は、唐代の実叉難陀（652～710年）によって漢訳され、東晋代の六十卷本と区別して、『新華嚴經』・『八十華嚴』とも呼ばれる。『開元釈教録』巻九の中に、「沙門実叉難陀……以天后証

聖元年乙未。於東都大内大遍空寺訳華嚴經……至聖暦二年己亥功畢」¹と記載されている。これによれば、実叉難陀が証聖元年（695）から、東都洛陽の大内遍空寺で『八十華嚴』を翻訳し始め、聖暦二年（699）に完成した。『八十華嚴』は漢訳されてから、華嚴宗の根本經典として東アジア仏教界で広く信奉され、歴代の大蔵經に収録されただけではなく、単独の經典としても書写・刊刻されている。現存テキストの中には、一行15字の版式を採用した貴重な宋代の単刻本が伝存している。

本論文では、台北故宮博物院（以下、「台北故宮」と略称する）²及び台北国家図書館（前身は国立中央図書館。以下、「台北国図」と略称する）所蔵の3種の北宋単刻本³を扱う。これら単刻本の共通点は、いずれも一行15文字という独特な版式を採用しているところにあり、それらについての具体的な紹介を通じて、当時の刊経活動を検討したい。

2. 北宋単刻本『八十華嚴』の現存伝本と書誌

「国立故宮博物院善本古籍資料庫」⁴が公開した情報によれば、当館の図書文献処に、清朝皇室旧蔵の北宋単刻本『八十華嚴』が二点所蔵されており、いずれも国宝級の文化財である。また、『国立中央図書館善本書目』⁵によれば、当館にも北宋単刻本『八十華嚴』が一点現存している。

¹ 『開元釈教録』巻九に、「沙門実叉難陀。唐云喜学。于闐国人。智度弘曠利物為心。善大小乘兼異学論。天后明揚仏日敬重大乗。以華嚴旧經処会未備。遠聞于闐有斯梵本發使求訪。并請訳人実叉与経同臻帝闕。以天后証聖元年乙未。於東都大内大遍空寺訳華嚴經。天后親臨法座煥發序文。自運仙毫首題名品。南印度沙門菩提流志沙門義浄同宣梵本。後付沙門復礼法蔵等。於仏授記寺訳。至聖暦二年己亥功畢。」とある。（CBETA 2020.Q1, T55, no. 2154, p. 566a13～b12）

² 当館には本文で紹介した宋代刊本以外に、以下の二種の元明代の手抄本が収蔵されている：「『大方広仏華嚴經』八十卷附〈普賢行願品〉一卷（唐実叉難陀訳、元釈溥光泥金銀写袖珍本、四函、四冊）；『大方広仏華嚴經』八十卷附〈普賢行願品〉一卷（唐実叉難陀訳、明弘治十六年鈔本、十六函、八十一冊）」。

³ 梁春醪、呉栄子 [1998]、pp.261～293。

⁴ 参照：台北国立故宮博物院善本古籍資料庫
<http://npmhost.npm.gov.tw/ttscgi/ttswebtrb?@@81B5F958C9E6334382B1>

⁵ 参照：台北国家図書館古籍与特蔵文献資源 (<http://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/>)

- ①台北故宮所蔵の単刻本『八十華嚴』（統一編號「故仏 000599～000679」）以下、「故宮淳化本」と略称する。
 - ②台北故宮所蔵の単刻本『八十華嚴』（統一編號「故仏 000481～000560」）以下、「淳化後修補本」と略称する。
 - ③台北国図所蔵の単刻本『八十華嚴』（館蔵編號「08660」）以下、「台北国図淳化本」と略称する。
- 以下、これらの北宋単刻本『八十華嚴』の書誌情報を紹介する。

2.1 「故宮淳化本」

「故宮淳化本」は北宋時代の単刻本で、もともと清代鍾粹宮の旧蔵品である。同本の書誌情報は、『欽定秘殿珠林統編』⁶、『国立故宮博物院善本旧籍総目』⁷などに記載されている。更に、「国立故宮博物院善本古籍資料庫」には、『八十華嚴』巻一の図版一枚と、同本の詳細な書誌情報が公表されている。現在、「故宮淳化本」全巻の図版を見ることはできないが、従来の目録等の記載を参照しながら同本の書誌情報をまとめよう。

「故宮淳化本」『八十華嚴』は、北宋淳化元年(990)から咸平三年(1000)まで杭州の龍興寺で雕造された『八十華嚴』八十巻と「普賢行願品」一卷からなり、全部で八十一巻(八十一帖)である。同本の雕造は、杭州龍興寺の沙門可孜と智海が、江南地域の僧俗を動員し、十一年間を費やして完成した。

「故宮淳化本」は折本であり、天地に単行の墨線があり、行間に朱線が引かれている。版式は、一版5面、一面5行、一行15文字(經序は一行14文字)であり、一紙の縦は24.1cm、一面の横は11cm、字体は楷書体である。版心は、紙のつなぎ目にあり、一行三段であり、上段は巻数、中段は版号、下段は刻工名が記されている。「普賢行願品」の版心だけは一行二段で、上段は行数、下段は版号である。

⁶ 『秘殿珠林統編』[1971]、p.266。

⁷ 『国立故宮博物院善本旧籍総目』[1983]、p.944。

各巻の現存状況は、巻三十八、巻四十、巻七十一の経文に欠文があり、巻四十に部分的な修正がある。巻十八、巻六十、「普賢行願品」の三巻に、後世の補配が部分的に存在する。巻十七、巻三十一、巻三十二、巻三十三、巻三十五、巻三十八、巻三十九、巻六十二の八帖は後世の補配である。巻一、巻三十一（補配）、巻三十二（補配）、巻三十三（補配）、巻三十五（補配）、巻三十八（補配）、巻三十九（補配）、巻四十の各巻末に音義釈があり、巻三十六の音義に一部欠損がある。

『八十華嚴』巻一の前に、「天冊金輪口神皇帝製」の「大周新譯大方廣佛華嚴經序」があり、巻末には、淳化三年（1000）頃の刊記がある。各巻の首題に「大方廣佛華嚴經卷第〇」、訳者欄に「三藏沙門實叉難陀新譯」と記されている。「普賢行願品」の巻末には、「貞元十一年（795）十一月十八日、南天竺國王進奉梵夾、十二年（796）六月十日奉詔於長安崇福寺譯、十四年（798）二月二十四日譯畢進上」という記述、及び訳場列位（内容不詳）⁸ が挙げられている。

「故宮淳化本」には多数の清宮藏書印が捺されている。例えば、「乾隆御覽之寶」（橢円形朱印）、「嘉慶御覽之寶」（橢円形朱印）、「宣統御覽之寶」（橢円形朱印）、「乾清宮鑒藏寶」（長方形朱印）、「秘殿珠林」（長方形朱印）、「秘殿新編」（円形朱印）、「珠林重定」（長方形朱印）、「乾隆鑑賞」（円形陰刻印）、「三希堂精鑑璽」（長方形朱印）、「宜子孫」（正方形陰刻印）、「荅封」（正方形墨印）である。この外に、「顧阿瑛」（長方形墨印）、「玉山人」（長方形墨印）、「在家僧」（正方形墨印）、という元代の藏書家顧阿瑛（1310～1369年）⁹ の旧藏印がある。

⁸ 台北国立故宮博物院善本古籍資料庫の記載を参照したが、図版が見られないので、内容は不詳である。

⁹ 顧阿瑛（1310～1369年）、元代の文学者である。清・陳衍『元詩紀事』巻二十七に、「瑛一名阿瑛、別名德輝、字仲瑛、崑山人。舉茂才、署会稽教諭、闢行省属官、皆不就。有玉山璞稿。明、楊循吉撰『蘇談』：顧阿瑛在元末為崑山大家、其亭館蓋有三十六处、每处皆有春帖一對、阿瑛手題也。記必名公、詩必才士、雖篆隸一二字、亦必選当代之筆。當時如楊廉夫、鄭明德、張伯雨、倪元鎮、皆其往還客也。尤密者為秦約、於立、釈良琦。後阿瑛遭乱、財尽散去、遂削髮為在家僧。」とある。

『欽定秘殿珠林續編』の記載によれば、「故宮淳化本」の中に、宋元明代の墨書題記がある。例えば、卷一の末尾に、「至正甲辰（1364）六月八日、顧阿瑛再閱于布經別業」、「大德三年戊戌（1299）九月三日、當寺老宿比丘子知敬閱」、「紹定庚寅（1230）、佛菩薩弟子陳□□敬閱」、「信士唐叔達看過」、「淳祐庚戌（1250）唐叔達敬再閱」、「紹興癸丑（1133）信士王元信敬讀」、「信士倪濟焚香資助考妣賓福」などが記されている。また、卷十七の末尾に、「明正徳丙子（1516）吳人沈淪題記」¹⁰と墨書されている。更に、「故宮淳化本」には、計三十八点の喜捨刊記が記されている。

2.2 「淳化後修補本」

「淳化後修補本」は北宋時代の単刻本の修補本で、もともと清代鍾粹宮の旧蔵品であった。同本の書誌情報は、『欽定秘殿珠林続編』¹¹、『国立故宮博物院善本旧籍総目』などに記載されている。更に、『国立故宮博物院宋本図録』には、同本の詳細な書誌情報が公表されている¹²。今では、

¹⁰ この墨書は『欽定秘殿珠林続編』に見られないが、「台北国立故宮博物院善本古籍資料庫」による。

¹¹ 『秘殿珠林続編』[1971]、pp.273～275。

¹² 『国立故宮博物院宋本図録』[1977]、p.122に、「周三蔵沙門実叉難陀新説。宋淳化咸平間杭州龍興寺刊本（図五〇）、経摺装、蔵経紙、版匡高二四・四公分、寛十一・二公分、每版釐為五牛葉、每半葉五行、行十五字。首附図五半葉、其後 署有「東京天寿寺沙門 懷湛 發心書」、「当州講華嚴大疏沙門從朗校勘」、「当州菩薩戒弟子周承展・徐承潤・黄文質・盛從晏・徐延福・徐延徳・丁紹昌勸募彫版」五行。審其紙質印色、甚不類経文、或係後代補刊。卷一首題大方広仏華嚴経第一、次行紙四格署三蔵沙門実義難陀新説。三行頂格題篇名、其後連濁正文亦頂格。卷末尾題空行為之。其後識云：「今此印板、依華嚴大疏所積経本、校勘已定、其間経文、或有欠失文字、並是翻訳時誤、觀疏主一一檢会新舊二経梵夾、將所欠文、編在疏中、不敢擅添経内、請後賢悉之耳。」再後附釈音、次行署杭州竜興寺天宮経蔵院新雕大字経印板所録、其紙質字体亦不類経文、似為後代補刻。余巻僅巻五十三、巻八十後識有捨銭開雕経板者姓名、其他各巻悉被剗去、其識款已詳載於秘殿珠林続編中、不為引述。至於各巻末所附釈音、其紙質字体並不類経文、蓋原書未有釈音、後人増補者也。而巻六、三十一、三十八、四十一、四十八、七十五諸巻並無釈音、巻五十三於釈音之後、

国立故宫博物院善本古籍資料庫において、全巻の図版と詳細な書誌情報が公表されている¹³。以下、従来の目録等の記載を参照しながら、同本の書誌情報をまとめよう。

「淳化後修補本」は、北宋淳化年間に杭州で雕造された刊本の後代補修本である。内容は実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』八十巻で、全部で十六函八十帖からなる。巻一の冒頭に、本来あるはずの經序は欠けているが、扉絵と刊記が附されている。各巻末には音義釈がある。巻八十の末尾に附されている刊記に拠ると、同本は、杭州龍興寺の沙門可孜と智海が、江南地域の僧俗を動員し、淳化元年（990）から咸平三年（1000）にかけて雕造したものである。つまり、「淳化後修補本」と、前述した「故宮淳化本」とは実質上、同版の印本である。

「淳化後修補本」は折本であり、天地には単行の墨線、行間には朱線が引かれている。版式は、一版5面、一面5行、主として一行15文字であり、一紙の縦は24.1cm、一面の横は11cm、字体は楷書体である。版心は、紙のつなぎ目にあり、一行二段であり、上段は巻数、下段は版号が記されている。各巻の現存状況は、巻十六、巻三十、巻三十一、巻三十八、巻四十一、巻七十九以外の各巻末に音義釈がある。また、巻八十の後に続くはずの「普賢行願品」は欠本となっている。

現存する各巻の首題に「大方廣佛華嚴經卷第○」、訳者欄に「三藏沙門實叉難陀新譯」と記されている。「淳化後修補本」にも多数の清宮藏書印が捺されている。例えば、「乾隆御覽之寶」（橢円形朱印）、「嘉慶御覽之寶」（橢円形朱印）、「宣統御覽之寶」（橢円形朱印）、「乾清宮鑒藏寶」（長方形朱印）、「秘殿珠林」（長方形朱印）、「秘殿新編」（円形

復有補釈音一篇、則增補之時、已無條例矣。是書字跡渾厚有力、有顔体風範、原藏鍾粹宮、秘殿珠林統編著録。書中鈐有：「秘殿珠林」朱長、「珠林重定」白方、「乾隆御覽之寶」朱円、「嘉慶御覽之寶」朱円、「宣統御覽之寶」朱円、「乾清宮鑒藏寶」朱長、「吳門善福」墨方、「嘉寧萬歲禪院」白円、「乾隆鑑賞」白円、「三希堂精鑑璽」朱長諸内府藏書章。此經本院尚藏有一帙。」とある。

¹³ 台北国立故宫博物院善本古籍資料庫

(<https://rbk-doc.npm.edu.tw/npmtpc/npmtpall?@@1798588353>) を参照。

朱印）、「珠林重定」（陰刻印）である。この外に、「壽寧萬歲禪院」（円形陰刻印）という旧蔵印、及び「呉門善福」（長方形黒印）という旧蔵印が捺されている。

また、「淳化後修補本」の巻一、巻五十三、巻八十には、計四点の題記が確認されている。

2.3 「台北国図淳化本」

「台北国図淳化本」は、前述した「故宮淳化本」や「淳化後修補本」と同版の印本である。刊記は確認されていない。恐らく上掲の二本と同様に、杭州龍興寺の可孜と智海が、淳化元年（990）から咸平三年（1000）にかけて雕造した単刻本であろう。現在、卷三十二のみ伝存している。同本の書誌情報は、『国立中央図書館善本書目』¹⁴に記載されている。更に「台北国図古籍影像検索資料庫」¹⁵には、同本の全巻のモノクロ写真と書誌情報が掲載されている。以下に、従来の目録等の記載を参照し、同本の書誌情報をまとめる。

「台北国図古籍影像検索資料庫」所収の図版によれば、同本は、巻末の經典本文に一部欠損があるが、音義釈は現存している。「台北国図淳化本」は折本であり、天地に単行の墨線があるが、行間の界線の有無は不明である。版式は、一版5面、一面5行、一行15文字であり、一紙の縦は24.1cm、一面の横は11cmである。同本の首題に「大方廣佛華嚴經卷第三十二」、訳者欄に「三藏沙門實叉難陀新譯」と記されている。図版では確認されていないが、『国立中央図書館善本書目』によれば、同本に、「國立中央圖書館藏書」（長方形朱印）、「崔震華」（正方形陰刻印）、「張繼」（長方形朱印）という蔵書印が捺されているという。

以上、三種の北宋単刻本『八十華嚴』の書誌情報を示した。これらはいずれも北宋淳化元年（990）から咸平三年（1000）において杭州の龍興寺で雕造された一行15字の刊本である。三種の単刻本の中で、「故宮淳化

¹⁴ 『国立中央図書館善本書目』、[1958]、p.680。

¹⁵ 台北国図古籍影像検索資料庫（<http://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/>）。

本」は全巻の図版を見ることができない。「台北国図淳化本」は巻三十二のみ現存しているが、「淳化後修補本」は図版が全巻公表されている。

3. 北宋単刻本の成立

本節では、これら単刻本の経板の雕造過程を検討する。

3.1 北宋単刻本『八十華嚴』の雕造歴史

「故宮淳化本」・「淳化後修補本」・「台北国図淳化本」の中で、「台北国図淳化本」（巻三十二のみ）は刊記が確認されていないので、具体的に研究することができない。しかし、書誌情報によれば、「故宮淳化本」や「淳化後修補本」と同版の印本である。従って、本項では「故宮淳化本」と「淳化後修補本」を中心に研究する。それらは、同版の印本であるが、「淳化後修補本」は「故宮淳化本」の後世修補本である。現在、「故宮淳化本」は実物も図版もまだ見ることができないが、『欽定秘殿珠林統編』の記載によれば、同本の巻一の前に、「天冊神輪口神皇帝製」の「大周新譯大方廣佛華嚴經序」があり、巻八十の末に、「普賢行願品」一卷¹⁶が附されており、全部で八十一巻であり、各巻の末尾に様々な刊記が記されている。この「故宮淳化本」と比べると、「淳化後修補本」にはいくつかの欠点がある。例えば、「淳化後修補本」には、巻一の冒頭に本来あるはずの経序が欠けており、巻八十の後に続くはずの「普賢行願品」が欠本となっている。また、「淳化後修補本」には巻一、巻五十三、巻八十の三巻に計四点の題記がある以外、他の刊記が見られない。とはいうものの、「淳化後修補本」は図版が全巻公表されているので、北宋単刻本『八十華嚴』の全貌を理解する上で重要なテキストである。従って、本節では、北宋単刻本『八十華嚴』に関する分析は、「淳化後修補本」を主としながら、『欽定秘殿珠林統編』等における「故宮淳化本」の記載も参照して行う。

¹⁶ 『欽定秘殿珠林統編』によれば、巻八十一巻の部分は後代に補配された。

まず、「故宫淳化本」巻一の末と「淳化後修補本」巻八十一の末には、以下のような刊記がある。

大宋杭州龍興寺結華嚴社沙門可孜、智海、廣化四眾、率淨財、選良工、彫造大方廣佛華嚴經大字印版一部、并普賢十大願王品、共八十一卷。起淳化庚寅、終咸平庚子、凡十一載工畢。召施主印經千本、寘於天下名山聖跡之間、募十萬人為社、常讀此經、同修淨業。所願一乘頓教遍布人寰、三有眾生俱明性海者耳。東京天壽寺沙門懷湛發心書、當州講華嚴大疏沙門從朗校勘、當州菩薩戒弟子周承展、徐承潤、黃文質、盛從晏、徐延福、徐延德、丁紹昌勸募彫版、湖州菩薩戒弟子沈文通捨錢助緣、東京菩薩戒弟子錢氏二娘圓就。

現代語訳：大宋杭州龍興寺結華嚴社の沙門可孜と智海は、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に勧進して淨財を募り、優秀な刻工を選び、大字版『大方広仏華嚴經』並びに「普賢十大願王品」一卷、計八十一巻の経板を雕造した。〔この事業は〕淳化庚寅（元年、990）の年から始まり、咸平庚子（三年、1000）の年に終わり、およそ十一年間を経て完成を見た。〔事業の計画は〕施主を集めて一千部を印造して天下の名山と聖跡に納め、十万人を募集して華嚴社とし、この經（『八十華嚴』）を常に誦読し淨業を修めることである。目的は、一乗の頓教を世界に遍く流布させ、すべての衆生に華嚴性海を悟らせることなのである。〔開板するための版下は〕東京（汴京）天寿寺の沙門懷湛が志願して書写し、當州（杭州）の講華嚴大疏沙門從朗が校勘を担当した。〔この他〕當州の菩薩戒弟子の周承展・徐承潤・黃文質・盛從晏・徐延福・徐延德・丁紹昌が彫版の費用を勸募し、湖州的菩薩戒弟子の沈文通が資金援助し、東京の菩薩戒弟子の錢氏二娘も援助した。

この刊記によると、北宋単刻本『八十華嚴』の雕造事業は、東京天寿寺の沙門懷湛が書写し、杭州龍興寺の華嚴会の沙門可孜と智海が民間の僧俗を動員して開版した。「懷湛」について詳細は不明であるが、その所属寺院である東京天寿寺は、五代の後梁乾化四年（911）に創建された寺院であり、「景德寺」、「天寿禪院」、「東相国寺」、「天寿院」とも呼ば

れていた。天寿寺は、麗景門の東にあり、後周世宗顯徳五年（958）の詔勅により、相国寺の土地の一部が与えられて新たに建設された寺院であるため「東相国寺」とも称されていた。顯徳六年（959）、「天寿寺」という寺額が正式に与えられ、真宗景德二年（1005）に「景德寺」と改名された。しかし、その後の兵災と洪水を経て、明代にはすでに消滅していた¹⁷。

次に、『八十華嚴』の雕造事業が行われた杭州の龍興寺は、南朝梁大同二年（536）に創建された名利（最初は「発心寺」）である。唐神龍三年（707）に「龍興寺」と改名され、呉越時代には「戒壇寺」となった。その後、北宋の大中祥符年間（1008～1016年）の初めに、勅命により「大中祥符寺」と改額されたが、北宋末の兵乱の中で焼毀してしまった¹⁸。

最後に、雕造事業の主導者である沙門可孜と智海は、北宋時代の杭州龍興寺（後の大中祥符寺）所属の僧侶であり同寺華嚴社のメンバーでもある。可孜と智海は『八十華嚴』の雕刻・印造・流通だけではなく、後に大中祥符年間（1008～1016年）以後、『大仏頂首楞嚴經』の刊刻と流通にも努めた。北宋単刻本の『大仏頂首楞嚴經』は伝わっていないが、思溪藏本『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』卷一の卷末に¹⁹、底

¹⁷ 明・李濂撰『汴京遺蹟志』卷十に、景德寺「在麗景門外迤東、周世宗顯徳五年（958）、以相國寺僧多居隘、詔就寺之蔬圃、別建下院分處之、俗呼東相國寺、顯徳六年（959）、賜額天寿寺、宋眞宗景德二年（1005）、改名景德寺、後有定光釋迦舍利磚塔、累經兵燹河患今爲平地。」とある。

¹⁸ 張大昌（清）『龍興祥符戒壇寺志』序：「龍興祥符戒壇古一寺也、創始於蕭梁之初、名發心寺、後改名衆善寺、又改名中興寺、至唐神龍三年、改中興爲龍興、而龍興之名立矣、呉越時、於此立戒壇院、乃有戒壇之名、宋祥符初、改名大中祥符寺、乃有祥符之名、名有三而寺則一也。建炎之初、寺燬於兵。於是興廢不常、或改爲軍器所、或改爲貢院、或改爲縣治、或改爲酒庫。其後、隨時修復、則或曰龍興、或曰祥符、或曰戒壇。」とある。

¹⁹ 『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』卷一の卷末に「校勘蘇州寺傳教沙門子璿、校勘杭州明教寺傳教沙門慶昭、大宋杭州大中祥符寺天宮經藏院沙門智海、可孜先募四衆、雕造『大佛頂首楞嚴經』一部十卷、印板今已畢工、復召信人印經一萬部、流傳天下、廣茲勝福、式贊丕圖。仍期講授受持、見聞隨喜、俱明本性、不歷僧祇、法界有情、同霑利樂者耳。」という刊記がある。

本にあった刊記も覆刻されている。この刊記によると、思溪蔵本『大仏頂首楞嚴經』が基づいた底本は北宋単刻本『大仏頂首楞嚴經』である。それによれば、北宋単刻本『大仏頂首楞嚴經』は大中祥符寺天宮經藏院の沙門智海と可孜が勧進し、蘇州寺の子璿と杭州明教寺の慶昭が底本を校勘したものである。智海と可孜は、僧俗の間で勧進して『大仏頂首楞嚴經』十卷の雕造を完成すると、一万部を印造して天下に流通させることを計画した。彼らは、『大仏頂首楞嚴經』の流布と読誦を勧め、多く人々が様々な利益を得られることを願った。

以上の記述によると、可孜と智海は咸平三年(1000)に『八十華嚴』の雕造を終えた後、大中祥符年間（1008～1016 年）以降に、同寺の天宮經藏院を本部として、『大仏頂首楞嚴經』の雕造を行った。その計画では、『大仏頂首楞嚴經』を刊刻して一万部を印造して民間に流布させるつもりであった。彼らの計画は実行され、その時に雕造された『大仏頂首楞嚴經』は民間において大きな影響を及ぼし、南宋紹興年間（1131～1162 年）には思溪蔵の底本として採用されたことが、上掲の刊記から明らかになった。可孜と智海がかつて雕造した北宋単刻本『八十華嚴』が、思溪蔵に対して直接或いは間接的に影響を与えたのかは不明である。

前掲した刊記の外に、「故宮淳化本」の中には様々な喜捨刊記が残されている。それは実物や図版が見られない現状でも、『欽定秘殿珠林續編』の記載によって知ることができる。「故宮淳化本」には計 38 点の刊記があり、その中で、少なくとも八点は東京天寿寺の懷湛が書写したものである。懷湛は、經文の底本だけではなく刊記も書写した。その他の現存刊記において、計八点は湖州の信者の喜捨刊記、17 点は蘇州、1 点は東京開封の信者による喜捨刊記である。

3.2 宋代単刻本の形式的特徴と底本

前述したように、北宋単刻本は大字版（一紙の縦は 24.1cm、一面の横は 11cm）であり、その巻一の尾題の後に、以下のような題記がある。

今此印板、依《華嚴大疏》所釋經本校勘已定。其間經文或有欠失文字、並是翻譯時誤。觀疏主一一檢會新舊二經梵夾、將所欠文編在疏中、不敢擅添經內、請後賢悉之耳。

現代語訳：この経板〔の底本〕は、『華嚴大疏』によって注釈された〔『八十華嚴』〕に拠って校勘し確定したものである。『八十華嚴』のテキストにおける文字の欠失があるのは、全て翻訳の時の誤りである。『華嚴大疏』の著者である澄観は、新旧二種の梵文テキストを確認し、欠文の所をもって、『華嚴大疏』に収録した。敢えて『八十華嚴』の中には加えなかった。この事情は後世の者に知悉してもらいたい。

即ち、龍興寺で刊刻された『八十華嚴』は澄観の『大華嚴経疏』に拠って校勘されたテキストを底本とした。『八十華嚴』には、文字の欠失があり、それは翻訳の際に生じたものであった。そこで、澄観は『六十華嚴』と『八十華嚴』の二種のサンスクリット原典を確認し、欠文を『大華嚴経疏』の中に補ったが、『八十華嚴』の本文は修訂しなかった。このように、龍興寺で開板された北宋単刻本『八十華嚴』は、校勘を経ていたため、従来の大蔵経テキストと内容がやや異なっているものであり、この点は注目すべきであろう。

以上見てきたように、北宋単刻本の底本は、澄観の『華嚴大疏』によって修訂されている。そこで、行15字の特殊な版式は、校勘を経た単刻本の系統と、校勘を経ていない従来の大蔵経テキストとの間に一線を画すための目印なのではないか、という仮説が立てられる。

3.3 宋代単刻本と華嚴結社の刊経活動

これまで、北宋単刻本の『八十華嚴』の書誌情報をまとめたが、北宋単刻本は宋代の江南地域の華嚴結社によって雕造された。当該地域における華嚴結社の歴史は、唐代にまで遡ることができる。高麗義天の『円宗文

類』卷二十二の中に、白居易が撰した『華嚴經社石記』²⁰（唐寶曆二年（826）九月二十五日撰述）が収録されている。これによると、江南一帯の華嚴結社は、唐長慶二年（822）以降、杭州竜興寺の住持南操らによって始められたことが分かる。華嚴結社の活動を反映する文献として、『華嚴經社石記』の外に、『円宗文類』卷二十二には『故修南山儼和尚報恩社会願文』、『海東華嚴初祖忌晨願文』、『華嚴九会礼文序』、『華嚴經社会願文』も収録されている。

北宋（960～1127）に至ると、全国統一を実現した宋王朝は、君主専制を強化するために、儒教思想を中心にしながら道教も仏教も重視する宗教政策を進めた。宋代の知識分子は、禪宗の語録と灯録を愛読していたが、翻訳經典にはあまり注目しなかった。しかし、『華嚴經』や『首楞嚴經』などは例外であった。宋代では、現世利益を得るために『華嚴經』を書写読誦することが流行しており、同時に『華嚴經』は浄土信仰の依拠する經典としても、宋代の知識分子によって重視されていた²¹。

例えば、宋代初期の省常（959～1020年）は、『華嚴經』「浄行品」に説かれる浄土思想に注目し、華嚴と浄土の思想を融合した結社を開創し、

²⁰ 『円宗文類』卷二十二に「有杭州龍興寺僧南操、當長慶二年（822）、請靈隱寺僧道峯講『大方廣佛華嚴經』。至華藏世界品、開廣博嚴淨事、操歡喜發願。願於白黑衆中、勸十萬人、人轉『華嚴經』一部、十萬人又勸千人、人諷『華嚴經』一卷。每歲四季月、其衆大聚會於是攝之、以社齋之、以齋自二年夏至今年秋、凡十有餘齋。每齋、操捧香胡跪、啓於佛曰：願我來世生華藏世界、大香水海上寶蓮、金輪中毗盧遮那如來前、與十萬人俱斯足矣。又於衆中募財、置良田十頃、歲取其利、永給齋用。予前牧杭州時、聞操發是願。今牧蘇州時、見操成是功。操自杭詣蘇、凡三請於予曰：操八十一矣、朝夕迫盡、恐盡社與齋來者、不能繼其志、乞為記誠、俾無廢墜。予即十萬人中一人也、宜乎志而贊之。噫吾聞一毛之施一飯之供、終不壞滅、況田千畝齋四時、用不竭之、征備無窮之供乎。噫吾聞一願之力一偈之功、終不壞滅、況十二部經、常出於千人口乎、況十萬部經、常入於百千人耳乎。吾知操徒必果是願。若經之句義、若經之功神、則存乎本傳。若社人之姓名、若財施之名數、則列于別碑。斯石之文、但敘見願集來緣而已。寶曆二年（826）九月二十五日、前蘇州刺史白居易記。」とある。（CBETA 2020.Q1, X58, no. 1015, p. 559b4～24 // R103, pp. 844b01～845a03 // Z 2:8, pp. 422d01～423a03）。

²¹ 魏道儒 [2001]、pp.212～213。

仏教界及び社会において深遠な影響を及ぼした²²。『仏祖統紀』卷二十六²³の記録によると、省常は、字造微、姓顔氏、錢塘の人である。7歳の時に寺院に入り、17歳で具足戒を受けた。淳化年間（990～994年）に杭州の南昭慶寺を住持していた。東晋慧遠（334～416年）が廬山で創設した蓮社に憧れ、南昭慶寺で蓮社を立ち上げようとした。省常は無量寿仏浄土を信仰したので、无量寿仏像を雕刻した。更に『華嚴経・浄行品』の血経も書写した。その後、結社の名称を「蓮社」から「浄行社」に変更して立ち上げた。浄行社に参加した僧侶は千余人、士大夫は123人であり、王旦（957～1017年）が浄行社の責任者に選ばれた。後に、浄行社の規模は拡大し全国に広く影響を及ぼした。

『円宗文類』卷二十二の中に、大常博士通判信州騎都尉錢易が述した『西湖昭慶寺結浄行社集総序』、枢密直学士権三司使右諫議大夫丁謂が撰した『西湖結社詩序』、翰林学士承旨通奉大夫尚書吏部侍郎宋白が撰した『大宋杭州西湖昭慶寺結社碑銘』が収録されており、これらはいずれも北宋代の杭州南昭慶寺浄行社の活動を記載している²⁴。

以上見てきたように、杭州一帯は、唐代からずっと華嚴結社の重要な拠点であり、宋代に入ると、更に浄土思想とも融和することになった。杭州の龍興寺、即ち後の大中祥符寺に置かれた華嚴社は、可孜と智海を中心として、仏教經典の雕刻・印造・流通にも取り組み、当時においても後世においても重要な役割を果たしていた。前述したように、可孜と智海は、先に咸平三年(1000)に『八十華嚴』（八十一卷、版式は一行15文字の大字版）を雕造し、千部を印造して天下に流通させた。更に、大中祥符

²² 魏道儒 [2001]、pp.216～218。

²³ 『仏祖統紀』卷二十六に「法師省常、字造微、姓顔氏、錢塘人。七歳厭俗、十七具戒。宋淳化中、住南昭慶。慕廬山之風、謀結蓮社。以西湖天下之勝遊、乃樂嘉遯。無量寿仏往生之仰止、乃刻其像。華嚴浄行品、成聖之宗要、乃刺血而書之、於是易蓮社為浄行之名。士夫預會者皆稱浄行社弟子。而王文正公且為之社首。一時公卿伯牧。三十餘年預此社者。至一百二十三人。其化成也若此。比丘同志。復千大衆。」とある。（CBETA T49, no. 2035, p. 265a8～16）。

²⁴ 鎌田茂雄 [1965]、p.239～249。

年間（1008～1016年）以降、『大仏頂首楞嚴經』（十巻、版式は一行15文字の大字版）の雕造を完成させ、一万部を印造して天下に流通させた。その結果、南宋紹興年間（1131～1162年）に、湖州で思溪蔵が刊刻された際に、『大仏頂首楞嚴經』の底本として、従来の福州蔵テキストではなく、可孜と智海が大中祥符寺天宮經蔵院で刊刻した行15字の単刻本が採用されたのである。そして、思溪蔵本『大仏頂首楞嚴經』は、単刻本の一行15字の版式だけではなく、北宋単刻本にあった刊記をそのまま覆刻している。この『大仏頂首楞嚴經』は従来の思溪蔵本と異なり、特殊な版式を有する故に、実際の思溪蔵版『大仏頂首楞嚴經』は欠本しており、「大中祥符寺本」によって補配されたのであろうという誤解すら生じた。

4. 結び

本論文では、主に北宋時代の単刻本『八十華嚴』について現存テキストを紹介した。まず、台北故宫所蔵の単刻本とその後修補本および台北国図所蔵の単刻本の書誌情報をまとめた。次に、これら三本に彫刻された刊記によって、単刻本の雕造歴史や形式の特徴を探り、これらが宋代の江南地域の華嚴結社によって雕造されたことを明らかにした。さらに、華嚴結社の刊経活動を巡って検討した結果、当該地域における華嚴結社の歴史は、唐代にまで遡ることができ、仏教經典の雕刻・印造・流通にも取り組み、宋代に至り広く影響を及ぼしたことが判明した。南宋紹興年間（1131～1162年）に湖州で思溪蔵が刊刻された際に、『大仏頂首楞嚴經』の底本としては、従来の福州蔵テキストではなく、可孜と智海が大中祥符寺天宮經蔵院で刊刻した一行15字の単刻本が採用されたことは、この影響の結果と言えよう。今後の課題として、北宋から南宋時代にかけて流行した単刻本系統の『八十華嚴』のテキストと大蔵經系統の間に関係があるかという問題が挙げられる。具体的な論証は、版式などの形式的特徴だけではなく、經典本文に着目した検証が必要不可欠であろう。

参考文献

【一次資料】

『大正新脩大藏經』、高楠順次郎・渡辺海旭主編、全 85 冊、大正新脩大藏經刊行会、1924～1934 年。

唐・智昇『開元釈教録』、CBETA、『大正新脩大藏經』第 55 冊、No.2154。

清・陳衍『元詩紀事』、上海古籍出版社、1987 年。

明・李濂『汴京遺蹟志』、中華書局、1999 年。

清・張大昌『龍興祥符戒壇寺志』、杭州出版社、2007 年。

西溪山人『吳門畫舫録』、叶氏刻本、1935 年。

高麗・義天『円宗文類』、CBETA、『卍新纂続藏經』第 58 冊、No.2154。

宋・志磐『仏祖統紀』、CBETA、『大正新脩大藏經』第 49 冊、No.2035。

『秘殿珠林続編』、台北：国立故宫博物院、1971 年。

『国立故宫博物院善本旧籍総目』、台北：国立故宫博物院、1983 年。

『国立故宫博物院宋本図録』、台北：国立故宫博物院、1977 年。

『国立中央図書館善本書目』国立中央図書館編輯、臺北、1957～1958 年。

【著作】

魏道儒 [2001] 『中國華嚴宗通史』、江蘇古籍出版社、南京。

鎌田茂雄 [1965] 『中国華嚴思想史の研究』、東京大学出版会。

【論文】

梁春醪、呉栄子 [1998] 「浅談宋版仏経」、『国家図書館館刊』、261～293 頁。

【データベース】

台北国立故宫博物院善本古籍資料庫

(<https://rbk-doc.npm.edu.tw/npmtpc/npmtplall?@@@1798588353>)

台北国家図書館古籍与特蔵文献資源 (<http://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/>)

<キーワード>

北宋単刻本、『八十華嚴』、華嚴グループ、華嚴結社、刊経活動

Summary

On the Block-printed Editions of the Huayan Jing in Eighty Scrolls Independently Published During the Northern Song Dynasty

LIU Yuanyuan

Since the Huayan Jing in Eighty Scrolls 八十華嚴 was translated into Chinese, it has become widely revered in East Asian Buddhist circles as a fundamental scripture of the Huayan School 華嚴宗. Among the surviving texts, there exist valuable independently block-printed editions from the Song dynasty formatted with 15 characters per line.

This paper aims to introduce the bibliographic information of these surviving editions of the Huayan Jing in Eighty Scrolls from the Northern Song Dynasty, to examine the process by which the printing blocks of these editions were carved, and particularly to point out the importance of the edition held by the Taipei Palace Museum; certain characteristics of the format and the original text will also be analyzed. Finally, the relationship between these editions and the Huayan Society 華嚴結社 in Jiang-nan region will be examined.

The history of the Huayan Society in this region can be traced back to the Tang dynasty, when it was involved in the engraving, printing, and circulation of Buddhist scriptures, and its influence spread to the Song dynasty. As a result, during the Shaoxing 紹興 period (1131-1162) of the Southern Song dynasty, the edition formatted in 15 characters per line published by Kezi 可孜 and Zhihai 智海 (both ca.10th century?) at Dazhong Xiangfu Temple's Tiangong Sutra Repository 大中祥符寺天宮經藏院 was adopted as the original text of *Dafodingshou lengyan jing* 『大仏頂首楞嚴經』 when the Sixizang 思溪藏 was printed in Huzhou 湖州.

Although it is unclear what is used as the original text for the Huayan Jing in Eighty Scrolls in Sixizang, it is clear that the format of 15 characters per line differs from that used standardly in Sixizang.

Keywords: independently block-printed editions During the Northern Song Dynasty; Huayan Jing in Eighty Scrolls; the Huayan Society; the publishing activity

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*